
シャントウゼー

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

シャントウゼー

【Nコード】

N9649C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

駅前にある美味しいポップコーン屋の話聞いた少年達。そこで彼等が聞いた話とは。ネイティブアメリカンに伝わる古い神話です。

第一章

シャントウゼー

アメリカのとある街。そこに子供達が集まっていた。

「おい、聞いたか？」

「何をだよ」

如何にもアメリカといった感じの洒落て、それでいて何処か汚く喧騒の味がする路を歩きながら話をしている。誰も彼も帽子や服をわざとだらしく身に着けて足や首を微妙に動かしている。歳は皆ハイスクールといったところか。背こそ大きいが顔つきはまだ幼さが残っている。

「駅前に出店ができただろ」

「駅前？」

黒人の少年の言葉を聞いて金髪の白人の少年が声をあげた。何かに気付いたかのように。

「あれか？ポップコーン屋の」

「そう、あの店だよ」

黒人の少年は金髪の少年の言葉に応えて頷く。その通りだと言わんばかりに。

「あのアジア系の爺さんのやってる店だけれどな」

「おい、あれは違うみたいだぜ」

黒人の少年の言葉に茶髪で顔中にソバカスのある白人の少年が言った。やはり彼もだらしく見える格好に動きをしている。それがどうもまだかじったばかりのrapperのように見える。無論彼等は本当にrapperのつもりなのだが残念ながらまだそこまでは達していないのだ。

「違うって？」

「あれネイティブだぜ」

少し浅黒い肌のもう一人の少年が言う。見たところヒスパニック

のようだ。その肌の色とラテンチックな顔がそれを教えている。どうにもアメリカらしい顔触れの少年達である。その格好も今いる場所もそうだった。その彼等が今本来からいたアメリカの住人の話をはじめたのだった。

「ネイティブ？この街に来たのかよ」

黒人の少年はそれを聞いて声をあげる。同時に顔を少し顰めさせた。

「西部からわざわざ出て来て」

「そりゃこのデトロイトにも来るだろうな」

茶髪の少年が言葉を返した。

「移動は自由なんだからな」

「いや、それでも」

それでも黒人の少年は言う。

「かなり遠いぜ。それでもよ」

「まあその爺さんにも何か事情があるんだろ」

茶髪の少年はまた言った。

「色々とな」

「それでその店のポップコーンは美味しいのかよ」

ヒスパニックの少年の言葉は実に素直なものだった。

「美味いんだつたらいいけれどな」

「さあな」

それを知っている者はいなかった。随分あやふやな状況と言えた。

「それもどうだか」

「俺も食べたことないしな」

「何だ、そうなのか」

ヒスパニックの少年はそれを聞いてどうにも落胆を感じた。それでは行つていいのかどうかもわかりかねたからだ。これは仕方がなかった。

「まあそれでもいいな。まずは食べてから」

「そうだな」

シャントウゼー

「じゃあ行くか」

他の三人も彼の言葉に頷いた。そうしてそのポップコーン屋に向かうのだった。

第二章

ポップコーン屋に着いた。見れば赤い屋根のごく普通の店だ。何の変哲もない。

「普通の店だな」

「そうだな」

彼等はそう話をする。店にいるのは一人の老人だった。赤い肌に皺だらけの顔をした彫の浅いアジア系の顔をしている。如何にもと違った感じのネイティブの老人だった。

「おじさん」

四人はその老人に声をかけた。

「ポップコーン貰えるかな」

「一人一つに」

「あいよ」

老人は笑顔で四人に応えた。そしてすぐに袋に入れたポップコーンが差し出された。四人はそれを受け取りすぐに食べはじめた。

「おっ」

「これは」

四人はそれを食べてすぐに笑顔になった。その理由ははっきりしていた。

「美味しいな」

「ああ」

笑顔のまま話を交える。彼等は今食べているポップコーンを気に入ったのだ。

「こんな美味しいポップコーンはな」

「はじめてだな」

「おじさん」

四人は老人に顔を向けて声をかけた。

「凄く美味しいよ」

「どうやったたらこんなに美味しくできるんだよ」

「ははは、それは当然だよ」

老人は四人に笑って応えてきた。屈託のない笑顔が皺により表わされていた。

「当然？」

「それどういうこと？」

「だってわしはずっとどうもろこしを扱ってきたからね」

老人は四人に対して語る。

「ずっとっていつとさ」

「子供の頃からか」

「ははは、それより前からさ」

四人に対してまた言った。

「それよりって」

「おじさん生まれていないんじゃない」

「生まれる前からだよ」

この言葉は四人にとってはわからないものだった。言葉を聞いてもどうにも首を傾げてしまう。老人が何を言っているのかわかりかねていた。

「どういうこと、それって」

「生まれる前からって」

「生まれ変わったっていつのかい？前世とかで」

「そうでもないんだよ」

老人は生まれ変わりは否定した。それを言われると四人は余計にわからなくなった。

「何かさ」

「そう言われると余計にわからなくなっただけだよ」

「知恵じゃよ」

老人の次の言葉はこうであった。

「知恵？どういうことなのかね」

黒人の少年は老人に問うた。

「俺完全にわからなくなっただけねど」

「そうだよな」

「全くだぜ」

他の三人も同じである。その彼等に老人はまたしても述べた。

「わし等はな。ずっとこの大地で暮らしてきた」

「ずっと？ああ、そうか」

茶髪の少年はここでやっとわかった。会心したように頷く。

「おじさんネイティブだもんな」

「ていうとだ」

金髪の少年も合点がいった。やっとといった感じであった。

「あれか。部族の」

「その通り」

老人の笑みが変わった。好々爺の笑みだった。

「はつきり言うところあるものをほんの少し入れてはおるな」

「あるもの？」

「調味料じゃないよな」

これも彼等にはわからない。何が何なのか。

「じゃあ一体」

「何なのか」

「これじゃよ」

老人が笑顔で出してきたのは一輪の小さな花だった。それは。

「タンポポ？」

「それを入れていたのか」

「そうなのじゃよ。ほんの少しだけな」 84

それが老人の言葉だった。話はそういうことだった。

「入れたのじゃよ」

「成程ねえ」

「それで美味しいのかな」

「わしの部族ではな。タンポポを大事にするんじゃ」

そう少年達に語る。

「ある理由からな」

「理由？」

「また何で」

「古い話じゃよ」

老人は四人に対して語りだした。静かな笑みと共に。

「よければ話すが。いいかの」

「ただならな」

「聞かせてもらいたいな」

「ははは、金なぞいらんよ」

軽やかに笑いながら四人にまた言った。

「もう貰ったしな。では話させてもらっぞ」

「ああ」

「頼むよ」

四人はポップコーンを食べはじめながら老人の話を聞きはじめた。何故かポップコーンが余計に美味しく感じだしそれと共に寂しい愛を感じさせられていた。

第三章

古い話だった。南風の神シャントウゼーという神がいた。

黒い髪を長く伸ばして穏やかな顔をしている神だった。暢気な性格でいつも木陰で寝ていた。その日もそうだった。

うららかな日差しと草花の香りの中で休んでいた。仰向けに寝てうとうととしていた。

そのうとうととした感じからふと目覚めると。前に広がる野原に一人の少女がいた。

小柄で緑色の服を着て黄色の髪を持っている美しい少女であった。見ればほっそりとしていて顔立ちも非常に整っている。彼が見たこともない程の美しさだった。

「君は。誰なんだい？」

シャントウゼーはその少女に尋ねた。

「どうしてここに」

「私は。ただここにいます」

少女はそう彼に語った。小さいがそれでいて澄んだ声で。

「ただここに？」

「はい、私はタンポポの女神」

「タンポポの」

「名前は。ポイゾナといいます」

穏やかに名乗った。その名前はシャントウゼーの心にも残った。

「そう。ポイゾナっていうんだ」

「この花を司っています」

「この花？」

「はい、これです」

彼女が野原から摘んで差し出したのは小さな黄色い花だった。彼女の髪の色と同じ色をしている。その黄色がシャントウゼーの心にも残った。

「その花は」

「タンポポです」

彼女は花の名を告げた。

「これが。私の花なんです」

「君の花なんだ」

「小さい花ですけれど」

そう言う顔と顔を少し俯けさせた。その動作が実にいじらしく感じたのはシャンタウゼーの心がもう変わりはじめていたからであろうか。それは彼にも少しわかった。

「いや、いい花だね」

彼は言った。

「明るくて。いい花だよ」

「明るいですか」

「うん」

にこやかな笑顔で彼女の言葉に頷いてみせた。

「君の黄色い髪と同じ色で。こんな花ははじめて見たよ」

「はじめて、ですか」

「今まで気付かなかったのかな」

笑顔が苦味を帯びたものになった。どうして今までこの花に気付かなかったのか自分がおかしかったからだ。それを笑顔に出したのだ。

「こんなに側にあつたのに。けれどこれからは」

「これからは？」

「ずっと見ていたいな」

元のにこやかな笑顔になって述べた。

「ずっとね」

「ずっとですか。それじゃあ」

「明日もいいかな」

笑顔を彼女自身に向けて声をかけた。

「明日もここで」

「この野原で」

「会いたいけれど。君と」

「この野原は。私の家のようなものです」

ポイゾナは澄んだ綺麗な声で答えた。ささやかで小さな声だがそれでもしつかりと聞こえた。その声もシャンタウゼーの心に宿った。

「君の」

「私はずっとここに来ます。ですから」

「僕がここに来ればいいだけなんだね」

「はい」

こくりと頷いてシャンタウゼーに答えた。

「宜しければ御願います」

「わかったよ。それじゃあ」

シャンタウゼーは笑って頷く。こうして二人の愛がはじまった。

二人の愛はそのまま静かに二人だけで育まれた。二人は毎日野原で会い楽しい時間を過ごした。だがそれに少しずつ異変が起こっていった。

ポイゾナの髪の色が変わってきたのだ。あの美しい黄色の髪は次第に色褪せて少しずつ灰色になってきていたのだ。

「これはどうしてなんだ」

シャンタウゼーは恋人の髪の色が変わっていくことに驚きを隠せなかった。それと共に美しさが消えていくことに深い悲しみを覚えた。

「君の髪が。どうして」

「私にも」

ポイゾナは哀しい顔で彼に伝えた。同じように哀しい声で。

「わからないのです。どうして」

「君のあの黄色い髪は戻らないのか」

「まさか。それは」

「いや、けれど」

シャンタウゼーは言った。

「こうして灰色になっていく。どうしてなんだ」

「私の髪は。もう」

二人にはわからない。どうしてポイズナの髪の色が変わっていくのか。だが髪の色はどんどん灰色になっていき黄色はなくなってしまっていた。そうして遂には完全に灰色になってしまい戻ることはないかのようであった。

その時は冬だった。ポイズナの顔は沈みシャンタウゼーも何をどうすればいいのかわからなくなかった。神であろうともわからなかったのだ。

「このまま君は」

「そんなのは」

シャンタウゼーのその言葉に顔を沈めさせる。涙で頬を濡らすだけだった。

「嫌です。私はずっとここにいたい」

「僕もだよ」

シャンタウゼーも泣いていた。涙が止まりはしない。

「君がいなくなったら。一体どうしたら」

「貴方と離れたくはないです」

二人の気持ちはもう決まっていた。愛し合いどうしても離れたくはなくなっていた。だがそれでもポイズナの髪の色は戻らずその可憐さも色褪せていっていた。もうどうしようもないかと思われた。

「どうしたらいいんだ」

シャンタウゼーは必死に考えた。

「この髪も君も。どうしたら」

哀しげに呟きながらポイズナの灰色の髪を触る。かつては清らかな花卉の様な手触りで眩いまでに輝いていた髪も今では枯葉の手触りで色褪せている。もう戻りはしないと想われた。

だが触ってみると。違ってきた。

「えっ!？」

シャンタウゼーは今自分が触ったポイズナの髪を見た。何と黄色

が戻ってきたのだ。手触りも。

「これは一体」

「どうしたのですか？」

「髪が戻ったんだ」

そう恋人に告げる。

「髪の色さが。今」

「嘘……まさか」

「いや、本当だ」

驚いた顔と声で恋人に語る。

「今本当に。これは」

「そういえば」

ポイズナは困惑した顔でシャントウゼーに告げた。

第四章

「貴方の息吹を感じると。何か身体が」

「よくなってきたのかい？」

「はい」

こくりと頷いて答える。

「どうしてでしょう。これは」

「どうして……それは」

恋人の言葉を聞いて考える。それはすぐに答えが出た。

「そうか」

納得がいき顔をあげる。

「僕の力のせいだ」

「貴方の！？」

「僕は。南風の神だから」

暖かい風を司る神だ。つまり春の暖かさを皆に送るのが彼の仕事なのだ。親である全ての風を司る神から与えられた尊い力である。

「それなのか。まさか」

「では貴方の力で私は」

「うん、ひよっとすると」

彼はまだ困惑した顔だが述べた。

「元に戻るかもしれない。じゃあ」

「試して下さい」

顔を上げてシャントウゼーに言う。全てを彼に任せる顔であった。

「是非。そうすれば私は」

「うん。きっと元に戻る」

「貴方と一緒にいられます」

二人は言い合った。お互いの顔をじっと見詰め合いながら。

「ではやるか」

シャントウゼーは自分の力を使った。自分の南風の力を。野原に

暖かい風が吹く。そうするとポイズナの灰色になってしまっていた髪が見る間に元の黄色になっていった。

「あ……………」

「戻った……………」

二人はその髪を見て言った。本当に戻ったのだった。

「シャントウゼー様、私は」

「上手くいった。いや」

彼は気付いた。どうしてポイズナの髪が元に戻ったのかを。今気付いたのだった。

「これは春の力だ」

「春の？」

「そうだ。私の力」

まだ吹き続けている南風を身体で感じながら言う。自分の力を。

「それがそなたを元に戻したのだ」

「どういうことですか？」

「タンポポだったな」

シャントウゼーはポイズナに問うた。

「そなたの花は」

「そうです。この花達こそが私自身」

ポイズナの周りにタンポポが戻っていた。黄色い彼女自身が。

「そうなのですね。だからこそ」

「タンポポは春の花」

シャントウゼーはまた言った。

「だから。春の風を司る私の手によって」

「戻るものだったのですね」

「そうだ」

シャントウゼーはにこりと笑っていた。そうしてポイズナの顔を見ていた。

「だから私は」

「私は？」

「そなたにずっと側にいて欲しい」

今自分の心を素直に述べた。心の中にある偽らざる本音を。

「いいか？春と共に」

「勿論です」

ポイゾナはシャントウゼーの顔を見て答えた。

「私は春に生きる者。ですから」

「永遠に」

「二人で」

二人は抱き合う。そうして心から結ばれた。こうしてタンポポは春に生きるようになり暖かい南風を受けて静かに咲くようになったのだった。

第五章

「へえ」

話は終わった。少年達はポップコーンを食べながら老人の話聞いていたのだった。話を聞き終えて目を少し丸くさせていた。

「そんな話があったのか」

「タンポポに」

「わしの部族の話でな」

話し終えた老人は出店の中で穏やかに笑っていた。その顔で少年達の顔を見ていた。

「古い話じゃ」

「古い話ねえ」

「そうは思えないけれどな」

「何でかのう」

老人は茶髪の少年の言葉に応えた。

「そう思うのは」

「いやさ、はじめて聞く話かも知れないけれどさ」

老人にこう前置きしてから述べる。

「何となくな」

「そうかい」

「いい話だよな」

黒人の少年が述べた。

「二人は結ばれたんだし」

「ああ」

「やっぱりハッピーエンドが一番いいな」

「その通りじゃ」

老人は穏やかな笑みのまままた少年達に応えた。

「だからわし等も今こうして」

「上手いポップコーンも食えるんだな」

「そういうことだな」

「いいことだぜ」

「つまりじゃ」

老人はまた少年達に言った。

「わしはポップコーンに春を入れておるのじゃ」

「春を？」

少年達はまた老人に顔を向けた。何のことを言っているのか興味が沸いたのだ。

「そう、さっきの話は聞いたな」

「あっ」

金髪の少年は今の老人の言葉で気付いた。それで声をあげた。

「そうか。そういうことか」

「どうということなんだ？」

その彼にヒスパニックの少年が問う。

「春を入れているって」

「だからあれだよ」

金髪の少年はヒスパニックの少年だけでなく他の少年達にも言った。

「タンポポは南風の神様の力で元に戻っただろ？」

「ああ」

「そうだけれどよ」

「だからそれなんだ」

彼は言葉を続ける。

「それで春の花になって。だから」

「あっ、そうか」

「だからか」

他の少年達もそれで気付いた。ようやく納得して頷くのだった。

「俺達は春を食べたのか」

「それで美味かったのか」

「わかったようじゃな」

老人の笑みはさらに穏やかでいいものになっていた。その穏やかな笑みは自然的であると共に目に見えない何かを見ているかのようだった。

「このポップコーンが美味しい理由が」

「ああ」

「わかったぜおじさん」

少年達は老人に対して答えた。

「美味しい筈だぜ」

「春を食っていたんだからな」

「それでじゃ」

老人はまた述べてきた。

「満足したか？」

「満足か」

「もう腹が膨れたかってことじゃな」

「そうじゃ。何ならもう少しやるぞ」

食べ物を食べている人間に対しては何よりも嬉しい言葉だった。

「金はいらんからな」

「おいおい、マジかよ」

「随分気前がいいな」

「ははは、わしの話聞いてくれたからな」

老人は少年達に気持ちのいい顔で笑って言う。

「その御礼じゃよ」

「本当にいいんだよな」

「ただで」

老人に対して念を押して問う。

「わしは嘘はつかんよ。何せ」

「インディアン嘘つかないってか」

ヒスパニックの少年が懐かしい言葉を口にした。

「そういうことだよな」

「ははは、まあそういうところじゃ」

ヒスパニックの少年の言葉に機嫌をよくしたのか大きな口で笑う。その笑みは実に屈託がなくそれと共に人に好感を抱かせるものであった。

「しかしあれだよな」

「そうだよな」

少年達は笑顔で話し合う。見れば老人のそれと同じ笑顔になってきていた。

「そんな話聞くと」

「余計にな」

「もつと欲しいのかい？」

老人は彼等に問うた。

「その春が入ったポップコーン」

「ああ」

「もらえるかな、おかわり」

「ははは。勿論じゃ」

老人はまた笑って彼等に応えた。早速袋にポップコーンを入れていく。

「さあさあ食べておくれよどんどん」

「ああ、どんどんくれよ」

「腹一杯になるまでもらうぜ」

彼等はそのポップコーンをまた食べはじめた。それは何処か春の味がした。南風が吹いて彼等を優しく包み込んでいた。

シャントウゼー 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9649c/>

シャントウゼー

2009年5月16日21時47分発行